

# 社会調査におけるホンネとタテマエ

## — 学力(歴)忌避感情に注目して —

渡辺稔(わたなべ総合教育研究所)

### 1. 問題の所在と本報告の課題

従来、学力や学歴など学校の周辺に関する社会調査においては、得られたデータのホンネとタテマエという側面について“議論”されることはあっても、それら“議論”のいくつかは未だ机上の論理に留まっているように見える。調査の実際的具体的対処について、議論が尽くされてきたとはいえない。この謂いは、児島(2006)の響みにそっていえば、タテマエ語りに対し「見ないアプローチ」<sup>(1)</sup>に終始してきたそのために、やや等閑視されている調査データの客観性に関する異議申し立ての試みである。そこで報告者は、その客観性を左右する要因のひとつとして、学力(歴)忌避感情<sup>(2)</sup>なる鍵概念を措定し、ラポールや動機の語彙とともに、これらが調査データに少なからぬ影響を及ぼしていることを明らかにする。その上で、社会調査におけるホンネとタテマエをいかに認識し調査データとしての価値を担保するか、いかにホンネを引き出すかについて接近してみたい。

### 2. 調査と研究の方法

上述の課題に応答するため、報告者が実施した「就業(雇用)状況についての調査」(06.11～07.1 実施)で得られたデータを分析する。本調査では、報告者の知己の間柄にある者を中心とする非正規雇用の若者20名に加え、その対照群として正規雇用20名と企業20社も調査対象とした。一定のラポールがあることに鑑みて、オーバー・ラポールにも留意しながらインタビューを行い、得られた少なからぬ語りについて、ホンネであるのかタテマエ語りであるのかどうかを質した。その結果、いくつかのホンネを引き出すことができたように見える。この点については当日、フロアの皆さんに批判を仰ぎたい。

### 3. 先行研究と用語の確認

必ずしも社会調査についての論考ではないが、仁

戸田(1987)は、タテマエの存在を指摘し、「回答内容が本心なのかどうか」と、語りについての疑義を表明している。谷岡(2000)も、調査においては「ウソ」を前提に調査すべきであるとする。日本人論を広汎に論じたベネディクト(1967)は、日本人にとって「感情を口外すること」は恥であると指摘し、必ずしも本心とはいえないことばを発してしまう特性に言及している。

学力(歴)忌避感情については、管見による限り直接このことばをテーマとした先行研究は見あたらない。そうした中で荻谷(2001)は、学力などを話題にすることは「差別感」や「忌避」感を誘引するものであり、「教育論の限界」でもあるとする。佐藤学(2003)は、子どもたちの「学びからの逃走」という文脈に限定しつつも、「大人社会にはニヒリズムや未来に対するシニズム」が浸透しているという。これらは、学力(歴)忌避感情を視野においた言説といえよう。

ラポールに関する先行研究は、インタビュー調査等における適切なラポールの重要性がおおむね当然視されている現状を踏まえ、本稿では割愛する。

動機の語彙については、ミルズ(訳書 1971)の解釈用法に従い、本報告でのテーマのひとつであるタテマエに近似する概念として使用する。

### 4. 調査データの分析

本調査で得られたデータを、以下の3つの観点によって分類し、本報告の目的に沿って分析する。

#### 4.1 ホンネ、タテマエと「学力(歴)忌避感情」

若者 26「学歴忌避感情っていうのはあるように思えますね。人前ではきれい事いってるような感じはします。(中略)私ですか、ハイ私もそういうところアリかな。」若者 16「確かに肯定も否定もしにくくて、っていうより話題にしにくいじゃないですか。」こうしたデータから、学業達成や学力(歴)に関する質問、あるいはそれらに関連づけた職業意識を扱う質

間においては、学力(歴)忌避感情がホンネ語りを抑制する傾向が一定程度認められる。

#### 4.2 ホンネ、タテマエと「ラポール」

若者 12「始めて会った人に都合の悪いことは話したくないですよ。(中略)当たり前ですよ。」他の同様ないくつかの語りからも、ラポールの有無、強弱によって、回答者の回答することへの積極性、回答内容の情報量並びにその質が左右されるケースがあることが示唆された。

#### 4.3 ホンネ、タテマエと「動機の語彙」

次の若者 37 は、高校時代から表明していた美容師志望は動機の語彙であったことを認めた。「口実っていうか、親とかにもまともに就職できない自分をなんていうのか、ごまかすっていうんですかね、カムフラージュするっていうか、そんな甘ったれた理由だったような気がするんですね。」

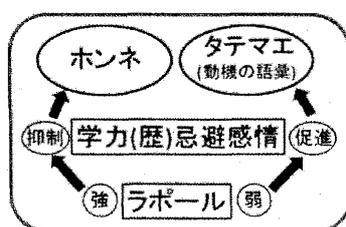
また、離職した若者と離職された企業からは次のような語りが得られた。若者 30「給料がまた安いんですよ。絶対だまされますよ。入る前に見ておかないと」これに対して離職された側である企業 51 は「給料への不満はない人は絶対いない(中略)ウチは、求人票にキチッと提示」していると述べた。就職や離職に際しても、若者、企業両者ともにある種のタテマエ、つまり動機の語彙が語られていた。

4.1 から 4.3 で見られたこうした知見は、3. の先行研究をおおむね支持するものであった。

### 5. 結論

上述のような語りを含む調査データ全体から明らかになった点を指摘する。

学力や学業達成、また学歴に関連する社会調査においては、期せずしてタテマエが語られる場合があった。その背後では、報告者の指した学力(歴)忌避感情が存在し、ラポールの強弱が学力(歴)忌避感情に対して抑制的または促進的に作用することが調査データの文脈から明らかになった。つまり、適切な強さをもつラポールは学力(歴)忌避感情を抑制しホンネ語りにつながりやすい。逆に、弱いラポールは学



力(歴)忌避感情を促進しタテマエ語りへと連なりやすいのである。左図は、ラポール、学

力(歴)忌避感情、ホンネ・タテマエ(動機の語彙)の影響関係を表す概念図である。本稿では詳述しないが、確かに弱いラポールにより促進的に高められた学力(歴)忌避感情がタテマエ語りを産出したり、回答内容の齟齬・矛盾を生じさせ、調査データの信頼性が疑問ではないかと思われる事例がいくつかあった。

以上のような状況から導き出された結論は以下の通りである。

第一に、学力(歴)忌避感情が懸念される調査においては、オーバー・ラポールに留意しつつ、可能な範囲で一定のラポールのある調査対象者のサンプリングが求められる。加えてそのサンプリングについては、対照群として隣接領域関係者や利害関係者——本調査では非正規雇用に対する正規雇用、企業——など、広い視角からのサンプリングが有効である(この有効性については当日報告する)。また本調査では、最終学歴を実際の学校名も含めてフェイスシートに記入してもらった。そのことによって、調査対象者の心理的な“仮面”がはずされ風通しがよくなり、ラポールが深まったように見える。

第二に、タテマエ語りを前提にした質問項目の設定などとともに、語りの“行間”から真実を読みとる技法、感性のスイッチをオンにしておくことを提案する。例えば、回答内容がホンネで妥当なものであるかどうかについて、念を押す——「見るアプローチ」<sup>③</sup>——といったようなこともそのひとつであろう。質問内容とその構成の仕方によって、タテマエや矛盾を顕在化させることも有効である。

こうした諸点を盛り込み、タテマエが語られる可能性を念頭においた一歩突き進んだ調査をデザインすること、そこで得られたデータの不断の問い直しをすることによって、より客観性の高いデータが期待できると思われる。結果として、より確かな知識を社会に提供できるであろうことはいうまでもない。

#### 〈注〉

- (1) 児島明, 2006, 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤』勁草書房より。
- (2) 学校や学力達成、学歴も含めた教育全般の領域について、意識的、無意識的であれ嫌悪感やネガティブな感情を持つことを指して使用する。
- (3) (1)と同じ。

※ 他の主要参考文献については、当日配布資料に記載。